

### ザ・ミューディアム：メディア論の試み(3)

NAKANO, Osamu / ナカノ, オサム / 中野, 収

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences

(巻 / Volume)

46

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

172

(終了ページ / End Page)

146

(発行年 / Year)

1999-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015074>

ら創造性を引き出したのである。もちろん、変化と創造の主体であった彼らに讃辞をおしまないけれど。

(10) もちろん、色彩だけではないだろう。ぼくらが日常的に識別しているものは、数限りない。「アーティキュレート」という働き、対象物の構成諸要因をひとつひとつ独立させて相互の違いを確認し、さらに要因間の関係をとらえるという働き、この働きなしに人間の外部(内部も)世界の認識などありえない。差異化し分節化してとらえること、これが認識作用であり、この認識の働きがあって人間は生きる。どう差異化し分節化するか、その能力・方法、あるいは差異を差異とする能力は、後天的に、文化によって、つまりはことばの獲得によって、個体の内部に形成される。能力・方法の形式の過程、差異化・分節化の内的メカニズムが学問的に十分に解明されているかどうか。それはともかく、ことばと認識作用のセットを外部からみるかぎり、右のように説明するしかない、と思う。

当性を根底からひっくりかえしかねない。

- (6) コミュニケーションの理想的スタイルの対極にあるのがマスコミュニケーションであるから、重大かつ深刻な機能障害はマスコミにおいて極点に達する、というのはたしかに反論しにくい。しかし「コミュニケーションの理想的スタイルは、対面したコミュニケーションである」というのは、なんらかの哲学的思想を前提にした命題であって、これが普遍的・絶対的に正しいという保証はない。別の前提を置けば話は違ってくるかもしれない。

それに、「マスコミの欠陥」「マスコミの機能障害」という命題もまた、ぼくには「含むところ」のある主張のように思えてならない。

- (7) 人間の精神作用の物的根拠は脳髄にある。精神作用の巨大・複雑・精妙・精緻をみると、この脳髄、中はどうなっているんだろうと思わざるをえない。意表を衝いた書き出しだったかもしれないが、つまりは、「ものみなメディア」にしてしまうのは、この脳髄の働き以外に考えられない。いや、脳髄の精神的な作用からすると、相当なことが起っても不思議ではない。おそらくは、なんの意思ももたない自然（現象）をメディアとみなし、人間相手以上のコミュニケーションをしてしまうのも、そして自然をそういう対象とみなしてしまうのも、やはり人間精神の作用にほかならない。

- (8) モダン／ポストモダンという文脈、前提となる公理の両義性・相補性という文脈、さらには合理的に成立する論理体系の併立という文脈——こうした二〇世紀末的（いや二一世紀的というべきかな）アポリアに、ぼくはメディア論のまわりをめぐるつもりだったというカンジなのである。もちろん、強く意識するようになったのは、前著の執筆中だった。がこの問題は、実は、もう二十年近く反芻してきた。人間の観念と思考がこうした二律背反的というか、両義性にひきまかれるというか、ふたつ以上の真実・真理の前に立ちつくすというか、こういう状態はかつてもあったことはあった。今は、ある意味で非常にオモシロイ時代なのかもしれない。

- (9) 「70年の若者」「全共闘世代」「ビートルズ世代」「団塊の世代」「ニューブリーダー」、名称はいろいろだが、誰々のことをいっているかはもう明らか。彼らはいいい時に生まれた。60・70年代は、文明的にも文化的にも非常に、いや異様に生産性の高かった時代だった、と二一世紀以降の歴史学は評価するはずである。あれだけの創造性の豊かさは、人類の歴史にもそうそう多くはない。つまり、時代そのものが文明的にも文化的にも変ろうとしていた。新しいものが創らねばならなかった。いうまでもなく、そういうものの創造主体は、これも歴史の語るところだが、若者である。彼らは、まさにその時、若者だった。もうこうなると幸運というしかない。そして、その幸運に、それこそ偶然遭遇した彼らであったが、画期的とでもいふべき文化創造性を発揮した。彼らが、特に豊かな創造力の持主であったわけではない。彼らが出会った場面が彼らか

するに「食いもの」が決定的に不足していたのである。この不足にもかかわらず「食に関するタブー」があって、不足にワをかけていた。この場合のタブーは文化というしかない。「食う」については、その根底のところに、「食う」ことの合理性に反する文化がある。食材、マナー、食器、料理の置き方・順序、食う順序等々、すべて文化である。

特に、味覚の言語的表現となると、時にふき出されなくなるような文学的表現にお眼にかかる。「食うことを、そこまで文化にしているのか?」といったくなるほどだ。

(3) ぼくらは、日本という国家・社会、伝統の日本文化・日本語、固有のメディア空間、独特の規範体系等々という、総じていえば、あるいはこの論文の文脈でいえば、固有の「メディア空間」で育ち生活している。他方、この「メディア空間」は多層的で、局所的には差異を含む構造をもっている。したがって、一方で日本民族に固有の世界像Ⅱ価値体系を共有しながら、他方では地域性、方言性、地域固有の規範性、家族等の所属基底集団の違い、客観的定義の困難な「生来の性格」の違いを背負っている。したがって個人的世界像なるものもあり、結局は人さまざま、さまざまなライフスタイル・生涯が実際には存在している。共通部分を重視するか、差異に注目するかは、議論の文脈と相対関係になっている。共通性や差異性があるかないか、どうあるかの問題ではない。

(4) サイバースペースというか、ヴァーチャルな映像空間で過ごし遊ぶ時間が多い人々の中には、現実世界のリアリティと、ヴァーチャルな空間でのそれとが、完全に転倒している場合がある。であれば彼らの世界像が、伝統的な現実世界の住人と異なって当然である。

さらには、既存の世界像(宗教もその一形態)に強い疑問をもち、特異な信念体系・価値体系に親近する世界像Ⅱ宗教への「改宗」現象もある。先進諸国に共通にみられるカルト現象がそれで、カルトの常として、その同一世界像の共有はごく少数の人々に限られるから、無数のカルト集団が登場し、「世界像」を競うことになる。そうみえる。

(5) 集団(大小さまざま)が、集団自体の意思決定せざるをえない場合がたしかにある。たとえば、ある地域社会が日常的に排出しているゴミの処理をどうするか、どこで処理するか、費用の負担をどうするか等々。処理が少しでもどこおった実例をすでにぼくらは知っている。滑稽といわざるをえない程度の惨状を呈する。したがって意思決定は不可避で遅滞を許されない。その際に、少数意見を可能なかぎり尊重する多数決を、十分に時間をかけ、お互いが納得するまで議論を行った後に、実行する——という民主的、な方法は果して現実的か。「お互いが納得するまでの議論」なんてありうるか。「十分に時間をかける」とはどのぐらいかけることか。それで急を上げる事態に間に合うか。この方法によって到達した結論は、本当に妥当かつ正当か(方法の正しさは結論の正しさを保証しない)、といった疑問がある。これらの疑問は民主的方法の正

「情報空間」とか、「メディア空間」とか、いわれてきたもの、これは、ぼくらの広義の日常的コミュニケーションの成立するフィールドもしくはシチュエーションである。二〇世紀後半の巨大な文明・文化的変容の中で、そして人間そのものの変質と相即しながら、この「空間」はどう変わったのか、をつかまえる必要がある。「ユニット」が行為主体の存立と運動にかかわるパラダイムであるとすれば、「空間」はその存在と運動の成立する「場」にかかわる。その「場」にどんなパラダイムがふさわしいか。次にぼくの思考がおもむくのは、そこでなければならぬ。

注

(1) ぼくはいつも、「人間の自由」とか、「文化の多元性」とか、「異文化理解」といった「反対命題」の提示が許されないこれら基本的命題に接するたびに、ある種のとまどいをおぼえる。「出発点のところでは人は自由ではなかった」(文化・ことばを選べない)、「個にとって多元性にどんな意味があるのか」、「そもそも理解が可能なのか」などと自問自答するしかない。さりとて、「人間的自由」の前に立ちほだかる言語、それ故の「言語批判」などに出会うとまたまた当惑。「言語批判を言語を使ってする」ことには、なにかこっちの気持にひっかかるものがあるからだ。コミュニケーション論の一番の根底のところにあるこの種の両義性・多義性あるいは相補性、端的にいつてしまえば決定不能性。ずっと気になっている。おそらく、このテの問題は、コミュニケーション論のみならず、人間科学に共通しているのではないか、と思う。

つまりこれにはなにもコミュニケーション論や人間科学のみのアポリアではない。行為としてのコミュニケーション、存在としての人間にとつての宿命的パドックスなのだ。挫折と失望・失意、いや絶望を予感しながら、人間は「自由」を希求し、異質な「もの」への興味・関心をもち、それを理解しようとする。異文化との交流を願う。しかしぼくの根っこのところの疑問は一向に解消しない。人間は強い願望はあっても原理的に自由な存在ではないし、異質への関心・興味には退屈からの逃避を感じるし、異文化交流にはなにか錦の御旗を手にした夜郎自大が潜んでいるように思えてならないから。

ぼくは、たとえば「人間の自由」という正義を主張して反対を許さない人物が、しばしば重大な自己矛盾におちいつている状態をみすぎたのかも知れない。自由の絶対性が措定されると、「人を殺す自由」を否定できない。しかし殺人は、被害者の自由を決定的に奪うことだ。

(2) たとえば日本人が飢餓の恐怖・不安から解放されたのは、この二、三十年である。人類史の圧倒的な部分は、飢餓の恐怖に彩られている。要

し、外部世界を認識する。「自我とメディアのユニット」の運動を説明すると、以上のような表現もできる。ここまで相当にしつこく書いてきたから、もうわかってもらえたと思うのだが。

ここでもう一点次のことに留意しておかねばならない。ちょっと前で「習得の対象としてのことばが、個体の外部にすでに存在していた」と指摘した。しかし、どこにどういう形でことばはあるのか、となるとこの説明は難しい。言語習得の際に、個体の外にあるのは、先行世代が共有していることば<sup>11</sup>言語規範としかいいようがない。この場合、眼にみえ手でさわられるようには存在していない。<sup>(11)</sup>ところが、すでに書いたように、たとえば文学作品があり、学術的な書籍があり、役に立つ記事があり、人を楽しませることばの群れが存在し、その他、音声・映像等を素材にした広義の作品がある。ことばというメディア、その他の音声・映像メディアは、感覚に訴える形で実在している。のみならず辞書・文法書等々の形で、ことばというメディアの総体、その構造的性質、使用規範を内容とする、メディアについて記述するメディアも存在している、明らかに外在している。この外在しているメディアは、例のユニットのコミュニケーションの対象<sup>11</sup>相手であると同時に、そのコミュニケーションの過程で内在化したメディアに付加される。もしくは内在しているメディアを増殖させる、そういう働きもしている。ただ、ぼくらが最初に、ことばを習得するのは、このメディアによってではない。これらすべてがコミュニケーションの過程である。この過程でユニットがどう形成され、どう作用しているか、そもそもユニットとはどんなものか。いくらカイメージが鮮明になっただろうか。

ここでは、ことばというメディアに関して書いてみたが、宗教というメディアが内面化した時、主体(ユニット)と外的世界の間どのような相互作用が成立するか、はことばの場合よりずっと明瞭である。応用問題として読者にも考えてもらいたい。すでに前稿で「死と葬と喪」というパラダイムを使って、間接的な説明は試みている。いずれ、もっと本格的に議論することになるはずである。

前稿と本稿と、『第二の章』は、人とメディアがつくる広義のコミュニケーション的生態を描写することによって、「自我とメディアのユニット」という公理的命題にたどりつくことを目標にしていた。次には、逆にこの命題を出発点にして、ユニットがどう構成され、その運動である人間的コミュニケーションがどう形成されているか、の記述を試みることになるだろう。

が、ここでいう公理的命題もしくは公理的パラダイムは、この「ユニット」だけではない。従来「コミュニケーション空間」とか、

にするために、以下、ある説明を試みてみよう。

ことば(言語)は、メディアの定義を広狭いろいろとってみても、やはりメディアである。ちょっと遠慮して強くメディア性をもっている、といいかえてもいい。いずれにしろ、ある状況では完璧にメディアとして機能する。人は成長の過程でこのことばに習熟する。いやおぼえる、内面化する、もっといえば内面化・習熟を強制される。日常的なコミュニケーションに関するかぎり、内面化したことばで十分である。この場合のことばは、たしかに最初、習得すべきものとして人格の外部に存在していたのは事実だけれど、習得してしまうと完全に頭の中に、人格の内部にある。メディアであることばと自我は完璧に一体化する、そういう状態になる。人間的コミュニケーションにあずかる感性・情緒・意識・思考の大半がことばの習得によって形成されているわけだから、構造的にみれば、「自我とことば」といういいかたすら不適切である。まさに一体であり、A・Bなる人物間のコミュニケーションとは、Aのもつ自我とメディアのユニットと、Bのもつそれとが相互作用すること、と表現するしかなくなる。さらにぼくらが文学作品を読むとする。この読む行為は、作品をつくり上げていることばとメディアと、ほとんどメディアそのものといっている主体との相互作用とコミュニケーションである。主体の内部メディアと、作品という外部メディアとのかかわりである。日本人は虹は七色と思ひ込み、アメリカ人は六色と考え、エスキモーは三色と信じている。このことは、感覚的な受容システムは後天的に形成されるもの、その仕掛けは文化・ことば・メディアによって規定され、その仕掛けによって外部環境が分節され認識されることを示している。要するに、ここにあるのは、ほとんどメディアとメディアの相互作用とっていいぐらいのものなのだ。もちろん、人の人格(感性から思考・行動まで)の形成がどの程度メディア(ことば)に依存しているか、構成された人格にどのぐらいメディアが含まれるかの科学的測定が必要なかもしれない。しかし、おそらく測定は不可能であろう。したがって、「メディアとメディアの相互作用」という命題の操作的有効性が確保されていなければならない。「虹の問題」は、識別できる色の種類は、手持ちの色を意味することばの数に強く規定されている、ということの意味している。<sup>(10)</sup>

したがって、文学作品を読むのも、テレビドラマをみるのも同じである。広義の記号体系・情報と接触するのも一緒である。ことば・メディアを内在化しその上で人格を構成する、つまりは「自我とメディアのユニット」によって記号を読み、情報・知識を解読・理解

ろうと思う。したがって、例の「ユニット」を論理的な前提もしくは公理とした、いうならば「ポストモダン」のメディア論は理論的には可能だけれど、これが唯一正しいメディア論とは断定できない、というのが只今の心境である。つまり、相容れないのだが、両方が成り立ちうる、としかいいようがないのではないか。「思想的・論理的に対立する複数のメディア論があってもいいのではないか」と思っている。研究者の気持ちのもちかたとしておかしい……？

が、ここで気分をとり直そう。後者の「ポストモダン」のメディア論によると、人間的・社会的コミュニケーションとは、ユニット内部での自我とメディアの相互作用、ユニット間の相互作用、ユニットと外部にあるメディアとの相互作用、複数(多数)のユニットから構成されるシステムもしくはネットワークの運動(作用)、システム・ネットワーク内でのユニットの運動である。他方で自我と自我との、人格と人格との直接的・対面的なコミュニケーションも存在する。事実としてあるから否定できない。しかし、丸裸の自我間のもしくは人格間のコミュニケーションは、あの前提を置くかぎり論理的にはありえない、あってもごく例外的なものとなる。いや、そうではないのではないか。たしかに論理的・理論的にありうる・ありえないという話はある。けれど現実に日常的にぼくらが実行しているコミュニケーションで、裸の自我と自我のダイレクトな関係など、本当にあるんだらうか。日常的なコミュニケーションのすべてが、基本的にユニット間のさまざまな相互作用という形をとっているのではなからうか。読者も、みずからと周辺で日常的にごく普通に行われ繰り返し返されているコミュニケーションを素直に眺めてみてほしい。メディアをまとめた、もしくはメディアと一体となった自我ユニットの広義の運動・作用以外のものを見出せるだらうか。

前稿と本稿で、メディアと人間のかかわりの実態と実体をさまざまに記述した。ある部分は極めて常識的・教科書的説明にみえたかもしれない。しかし、ぼくとしては、その記述に常に、今書いた「自我とメディアのユニット」という命題を含蓄させていたつもり。そう読めないとしたら、ぼくの書き方の拙劣のせいであろう。もちろん、「自我とメディアのユニット」というパラダイム自体にわかりにくさがあることは承知している。「メディアは道具・手段にすぎない」という観念・メディア観は、相当に鞏固にぼくらの中にあるというか、そのほうが考えやすい、ということもある。この考えからすれば、メディアは明確に自我の外にのみある。部分的であれ自我に内在化するなんて、到底考えられない。大変に常識的にいってそうである。そこでこのもうひとつの命題のイメージをより鮮明



個人的な趣味に限りなく埋没し外部世界との関係がまったく断絶してしまっているオタク、ほとんど「カーナビ」に頼って車をドライブする人々等々、すでにその生態は前著でも紹介はしている。実際には、紹介しながらそこにメディアと人間のもうひとつ、新しい関係が出来ているのではないか、という疑いは相当に確信的疑いになっていた。「メディアは自我の一部」というのは、すでにして伝統的・近代的な主体と外部の関係を反転させている。ところが右にあげたいいくつかのケースから、論理的にしかも面倒な思考のプロセスもなしに「メディアのつくる世界（ネットワーク）に自我が完全に取り込まれている」「自我とメディアが境界がなくなって完全に融合している」「メディアと自我がつくる世界が外部からまったく孤立している」「メディアと一、個体でひとつの世界が出来上っている」「自我はメディアと一体化して初めて一個の主体として行動しうる」「メディアと一体になった主体の存立にとって外部環境との関係は必要条件ではない」「自我がメディアとつくる世界はそれ自体で完結した自立した世界たりうる」等々の命題を導出することができる。さらにこれら命題群が共通に内包している意味から、もうひとつ抽象度を上げた命題が可能である。つまり、「メディアは自我に外在しているのではなく、自我とメディアが合体してひとつのユニットを構成する。このユニットが社会もしくはシステムもしくはネットワークもしくは有機的な集合態の基本的な構成要素である（社会の構成要素はいわゆる自我ではない）」という命題である。この命題が前提にしている人間観、自我の広義のメディアとの関係のとらえかた、個と全体との関係等についてのイメージは、デカルト的近代というか、19世紀社会科学・経験科学的近代というか、いうならば20世紀にいたるまで自明視されてきた近代からとり出されるそれらイメージとは、まったく異質と断言していい。「ポストモダン」に属するイメージというしかない。

右に書いたような思考の動きが、前著を書きながらぼくの中にあつた。本を書き進めるための基本的な理論基盤とは異質な思考の動き、ずい分と妙な気分ではあつた。そして書き終わった時、もうひとつの思考のほうも着々と(?) 進行していたわけであつて、「自我のメディアのつくるユニット」「自我とメディアの分割不可能、分割の許されないユニット状態」というイメージが明確になつた。そう考えるしかない、と思うようになった。すでに指摘したことではあるが、こうなってしまうと、論理的にそして倫理的(?) に、書き直しは必然である。「もうひとつのメディア論が可能だ」というのは、そういう意味においてである。うまくいえそうもないし、いささかはつきりしないところではあるのだが、「すべては依然として近代に属している」という前提のメディア論もまだ可能だ

ンガ、新聞、雑誌などのメディアと部屋は等価・相同である」「メディアもぼく自身である」「個室とメディアは自我の一部である」「……」といった、従来のメディア観、いや人間観を反転させるようなことを、問い詰められてといった状況であったにしても、さらにといったのけた。前にも書いたように、彼らの意識には、メディア観・人間観をひっくりかえすとか、人間とメディアに関するパラダイム転換をするとか、そういう気持はおそらくはなかったろう。つまりは自分たちがスゴイことをやっている、スゴイことをしているなどとは思っていなかった。しかし、今になって思うと、20世紀後半の思想的状況の中で「近代」が対象化され、「ポストモダン」へと主題が移行・発展してゆくそもその出発点は、日本の場合、実感的にはこの辺にあってはなからうか<sup>(9)</sup>。しかし、メディアやコミュニケーションに関する観念・パラダイムの惰性態とでもいうべきものがあって、当然のことながらぼくの中にもあって、「メディア・コミュニケーションを道具・手段として扱う近代性」「道具・利器としてのメディアの導入・利用による文明の発展」といった考えが支配的だった。前著で「メディア人間」「メディア・キッズ」の驚くべき生態を紹介し、その新しさ、を強調しながらも、「近代」を超えた新しい人間像と明確に定義し、そういうものとして扱ってはいない。残念ながらその点に関して前著の立場は曖昧で不徹底であった。つまり、端的に言って、「メディア人間」「メディア・キッズ」は、合理的（近代に属する）な理性の持主で、「近代的自我」と同一カテゴリーに属し、メディアを道具とみなし、なんらかの目的があってコミュニケーションをする存在とみていた。自我と「外部」は峻別され、「外部」は自我が存立するための手段であり、その点で自我は常に「外部」から自立していて主体的であり、理性を働かせて「外部」を利用し「もの」を創造する「ホモ・ファブリクゥス」（創造する存在）とみていた、と今思う。

もちろん、「カプセル人間」とか、「『外部環境』と自我の融合」とか、「自我の律動的運動としてのコミュニケーション」とか、「メディア人間」といったパラダイムも70年代から使っていたわけで、「メディア人間」が過不足なく「近代的自我」に含まれる、と確信していたわけではない。曖昧であったという所以である。

ところで、車をドライブさせながらのウォークマンもそうだけれど、パソコンの前でインターネットやゲームにハマッてしまっている人のたたずまい、電車・バスの中でケイタイで話し周囲に対してまったく関心を示さない若者、午前の電車内で傍にいる他者などにまったく無関心でお化粧に熱中している女性、家族四人がそれぞれ個室で別々に同じ番組をみている状況、これを通常とみなす意識構造、

幅に、そして最も効率よく利用したのも、この理性であり、さらにいうとメディアを手段・道具としての確に位置づけたのも、この理性だった。その上でメディアを社会的な手段として十分に使いこなした。現在、新聞等の既成の伝統的メディア（テレビを含む）から、ニューメディア・マルチメディア（70年代以降登場の情報蒐集・処理・伝送を有機的に統合したメディア、コンピュータが主役）までを、ここまで普及させ使いこなしてしまったのも、この理性である。ついでにいえば、ここに来て突発気味のインターネットの逸脱的利用、インターネットへの病的な耽溺には、極限まで昇りつめてしまった理性の姿、成熟しきって自家中毒におちいった理性、をぼくはみる。理性は最も革新的なメディアを道連れに、いやこのメディアと出会い手を結んだことで、「近代」の辺境にまでできてしまった。がこの革新メディアを創造したのはほかならぬこの理性であり、このメディアをたずさえた理性の道行きは、いかに辺境にまでできたとはいえ、まだ近代のうちである——というのが、60年代後半、若い世代のメディアとのかかわりの「奇怪」を目撃し、「近代」を相対視せざるをえない地点に自分を見ていたぼくの、いつわらざる感想であった。つまり、人間とメディアの「奇妙」な関係、自我の内部に取り込まれ始めたメディア、その主人公として人間、これらを、いまだ近代に、近代的自我に、近代の「もの」観に属している、と考えていた。いかに近代から距ってしようと、極限にまで拡張された近代に、まだ属していることにした。「カプセル人間」も、近代に所属する。近代の外側に出てしまったとはまだいえない。ポストモダンのアイテムではない、というのがぼくの立場だった。もちろん、すでに「ポストモダン」がある種のシリアスな問題を提示していることは理解していたつもりだし、「カプセル人間」はひょっとすると、という気がしないわけでもなかった。しかし、「近代」という文脈の上ののっている、というのがぼくの考えであった。しかし、「カプセル人間」たちの「近代」からの逸脱もまた事実であって、であるとすれば、「カプセル人間」——「近代」という観念に對してもうひとつの原理的思考に基づく観念を對峙させねばならない。どうやら問題はそこまできたらしい、と思うようになったのが、前著の執筆中であつた。

## 十 人間—メディアユニット

60年代の若者たちは、「個室はメディアである」「個室は自己表現である」「個室はよく自身である」「テレビ、電話、オーディオ、マ

彼らが、メディアについて非伝統的・非近代的な観念形態（イデオロギー）をもっていて、かつ意識的であったかどうかなどは問題ではないのかもしれない。その時、ぼくがむしろ思ったことは、彼らが自我とメディアの一体化を、実行していることだった。しかも、伝統に抗して「一体化」しているといった自覚もなく、「キミにとってメディアとは？」という、本人にしてみればやくたいもない問に仕方なく答えて「自我の一部」といったにすぎない。とりたてていうほどの大問題などとは全然考えていなかった。だからこそ、なおのことぼくにとっては衝撃的だった。

彼らが、意味のある外部環境とその構成要因をどうみているか、どんなイメージをもっているか、どう関係しているか、を問いたただいた。これに対する回答から、人格の外部にあるさまざまな「もの」や人間やメディアや情報や知識や、そういうものがすべて同一のカテゴリーに属していて、彼らの自我にとっては同じ意味をもっていること、そしてさらには、こうした外部にあるはずのもろもろの「もの」や「こと」と自我とが、内部と外部、主体と道具・手段、使うものと使われるものというふう峻別されず、それこそすべてが自我の一部とみなされていて、そしてもうひとつあえていうと、もろもろを結局は広い意味のメディアとみなし扱っていること等々が明らかになった。厳密に論理的にいうと、デカルト以来の近代の観念からほぼ完全に離脱している、といわざるをえなかった。「カプセル人間」などというちょっと異様な表現も、その衝撃のせいだったのだろう。

近代化―産業化という文脈、さらには生活の物質的向上を中心にすえた合理化という文脈、これらの文脈上の展開を推進した意識の特性を、道具的理性もしくは数量的理性と表現できる。60年代以来の高度成長あるいは所得の急激な増加は、この理性がひとり主役を演じていたとでもしなければ説明できないだろう。この理性、近代的理性といってもいいし、デカルト的理性といってもいい。世界的にみれば、近代化の主役、市場経済の促進主体であって、この数百年の歴史の主人公であったといっても過言ではない。おそらく、歴史上、物心両面で最も大きな最も有用な被造物を作った功績は十分に評価しなければならない。もちろん、この理性が十分に扱いきれなかった問題も多々あって、公害・環境問題は、この理性を中心に構成された論理体系と社会システムには入りきれなかった。公害・環境問題は、この理性が受けた最初の本格的な挑戦であったのかもしれない。少なくとも、それまでこの理性はまったく普遍的かつ絶対、完全無欠な存在であった。いうまでもないが、近代に登場したいくつかのメディアを創造し、それらを道具・手段として、最も大

るインデックスとして、「メディア人間」は有効のほずである。当該のオーディエンスの中に真正の「メディア人間」がいようがいまいが、である。ちょうど、60年代までの産業社会の文化状況の把握に、「外部志向型パースナリティ」が大変に役に立ったように。そして役に立つ時、典型的な「外部志向型」の人間がいるかないかなど関係なかった。「メディア人間」もそういうもの、と考えている。

「メディア人間」というパラダイムを意識して使うようになったのは、前にも指摘したようにこの数年であるが、イメージとしてもつようになったのは、先にも指摘したように60年代後半から70年代にかけて。前著で再三及した「カプセル人間」のさまざまな属性は、いうならば「メディア」に強く親和的で、「カプセル人間」のイメージ・中身は「メディア人間」のそれと多くの共通点をもつ。「カプセル人間」ということばを思いついたのも、60年代後半の若者（主として団塊の世代、全共闘世代、ビートルズ世代が頭にあつた）のメディアに対する、ぼくからいえば、意表を衝かれたというか、眼を瞠ったというか、衝撃的というか、まあそうとしかいえない驚くべき態度・接触・利用・享受のスタイルをみてしまったから。

60年代には、他方でたとえばマクルーハンの著作が紹介され始めた。紹介の仕方に問題ありだったのだが、メディアをまったく新しい視角からみているマクルーハンはわかった。ところが、近代に懐疑的であったはずの全共闘なのだが、さすがにマクルーハンの新しさを認識できないのみならず、マルクスとの惰性的関係をずっと引きずって、今書いたマクルーハンの紹介のされかたも手伝って、思想的には全共闘は反マクルーハンであつたと、ちょっと独断的かもしれないが、今思っている。もちろん、それは全共闘の中の思想的に尖鋭な部分であつて、現実に対して漠然とした違和感をもち、全共闘運動に共感し同伴していたにすぎない普通の若者は、まだマクルーハンを知らなかった。ここからがぼくの強調したいところなのだが、にもかかわらずその彼らが「メディアは自我の一部だ」あるいは「自我を構成する重要な要因だ」といったのである。彼らが人間とメディアの思想史の流れにどの程度知識があつたか、大変に疑わしいのだけれど、この彼らのことばには、人間主体とメディアとの、一般に人間と人間にとって有意味の外部環境との、伝統的・近代的な観念形態<sup>イデオロギー</sup>、まったく自明のものとされてきた観念形態<sup>イデオロギー</sup>と、論理的にはほとんど相容れないものが含まれていた。要するにメディアは、主体の存在と運動に役に立つ手段・道具であつて、それが部分的にでも主体に内在しているなどということはいえない。

ろがある。ある歴史・社会状況の下で、ある種の意識の表出と行動を示し、かつ、その表出と行動が社会成員の多くによって共有され、このパラダイムから敷衍されるなんらかの仮説によって彼らの将来に属する意思・思考・行動が予測可能である、という意味で。「メディア人間」は、'60・'70年代以降、最初は主として若い世代に、今日では少なくとも五十代以下に共通してみられる人間類型にかかわる。もちろん、人格の特徴自体を直截にいつてるのではなく、先行世代に比べて相対的にコミュニケーションの相手として人間よりメディアをより好むという傾向を認識し分析し記述するためのパラダイムなのである。いうまでもないが、ひとつの類型のもしくは理念的的に記述された「メディア人間」にそっくりの人間がいるわけがない。もちろんいるかもしれないけれど、方法としては「いない」という前提である。しかし、今の五十代の人々よりも、三十代の人々がより「メディア人間」的であるとはいえる。もちろん、同一世代に属するAとBとで、AがBよりより「メディア人間」的であるということも成り立ち、さらにはAよりもっと「メディア人間」である人もいるはずだ。

ここまでの議論で明らかなように、完璧な「メディア人間」や、完璧な「非メディア人間」がいるわけではない。人のありようはあくまでも相対的であって、だから社会科学にはこのテの操作概念が大変に有効になるわけだ。役に立つのは、メディアを考える社会学者にとってだけではない。こういうこともある。「メディア人間」は、いうまでもなく、個々のメディアそのものに対して、メディアア上に表示される「作品」に対して、「作品」の内容・中身・表現の方法のスタイルに対して、創作であるならストーリー・シーンの構成・登場人物・役者等々に対して、なんらか傾向をもった反応をする。けだし、「メディア人間」は'60年代以来のニュー・メディアについての「メディア・リテラシー」が相対的に高いからである。ところで、現在放映されている特定テレビ番組についていうと、そのオーディエンスは、より「メディア人間」的な人々とそうでない人々を含んでいる。オーディエンス全体の「メディア人間」度はどの程度か、より「メディア人間」的な人々の番組に対する態度や評価、そうでない人々の態度と評価について、制作者は多かれ少なかれ関心をもたざるをえないだろうし、場合によっては右に書いたことに関してより論理的な分析と認識をもたざるをえない。バブル期のように「自分で作りたいと思う番組を作っていればいい」というわけには、もういかない。時には、オーディエンスの社会的・文化的構成について、科学的・論理的に非常に正確な認識すら必要な場合があるだろう。その場合、オーディエンスの全体的傾向を測定す

とはいえ、他方、「天が下に」そんなにしょっちゅう新しいことがあるわけではないのも事実である。本、当、に、新、し、い、「もの」などそうは出現しない。新しそうにはみえても、既成の思考の枠内で考え評価し位置づけをすればすんでしまう場合のほうが圧倒的に多い——と本論とさして関係があるとは思えない議論をしてきたのは、ほかでもない。「メディア人間」というパラダイムの新しさというか、既成の思考様式へのインパクトというか、19世紀以来の社会科学のパラダイム構成に対する革新性というか、そういう問題について、このへんでぼくなり考えを提示すべきだと思ったからである。前著までもそうだったし、本稿でも「メディア人間」の異文化性、異質性、新しさについて再三ふれている。その際、あるタイプの読者が、「なにも新しがることはない、メディアを広くとれば、人とメディアのそ、う、い、う、関係は昔からあったではないか」と反論してくることは予想していたし、実際そういう反論はあった。「メディア・スーツ」というキーワードに対して、「メディアをスーツのようにまとるのは、今に始まったことではない。源平の時代から戦国時代にかけて、武将が身につけた武具は、どの程度実用的であったか」というわけである。もちろん、「カーナビ」というメディアと人とかかわりについて、「昔からあった」という指摘はさすがになかったけれど。

すでに書いてきたことから明らかに、ぼくは、人間性（＝人間的な自然）が不変かつ普遍だという考えをとらない。だから、人口量と文明の発達形態を示すS字カーブと人間類型を対応させ、伝統志向・内部志向・外部志向という三つのタイプを設け、意識と行動の分析をやってみせたD・リースマンには大いに敬意を表したい。もちろん、この場合のたとえば「外部志向」は、実在する人間についていっているのではなく、歴史的・社会的状況の中の人間のつくる集合態の運動を説明するための操作概念である。社会科学的に有効な概念の多くは、社会的実体と一対一対応をする実体概念ではなく、歴史的・社会的な動態のもつ属性の名称で、科学的思考のための触媒として、あるいは思考の「経済」として役に立つ操作概念である。ただし、江戸時代の平均的日本人がより伝統志向的で、現代のそれがより外部志向的である、とはいえる。「天が下に新しきことはなし」というべきなのかどうか、江戸時代の庶民の中にタイムワープしてまぎれ込んだ現代の日本人がいたとすれば、日本語らしきものを話しているだけに、当時の異人さんよりよほど「異人」にみえたにちがいない。あの時代、現代人に似たタイプの人間など、どこをさがしてもいなかったはずだ。だから「今に始まったことではない……」とはいえない。そして、いうまでもないが、「メディア人間」もこの伝統・内部・外部志向といった類型と似たところ

「この世に新しいものなんか、そうめった・やたらにはない。新しくみえても昔あったものが装いを換えて現われているだけだ。人は常に歴史に学ばねばならない」とは、一般的には活性度の低下した老いた知識からでる台詞であろう。ある種の知恵がたしかに語られているけれど、同時にこれは「古い」を告白した台詞なのではあるまいか、嗚呼！「古い」が現実と伍してゆくためには、過去の経験・知恵といった「権威」に依拠するしかないのか。

ぼく自身が老人で、だからムリをやっていているつもりは毛頭ないと思っていたのだが、「歴史は繰り返さない」「循環しているようにみえてもスパイラルをなしているのだ」。たとえばの話だが、かつては東海道五十三次だったのが、今では新幹線で二時間余、航空機なら四五分、そして情報の伝達時間は零である。この速度、この時間の短縮は、もう絶対にもどらない。かつては無意味であった地球の裏側の出来事が、これまた所要時間零で伝わり、意味をもつようになった。こうしたことも、単純に速度や時間の問題ではない。その速度や時間自体がなんらか文化的な意味をもつようになるだけでなく、早くなること・短くなることが新しい価値、新しい意味、したがって新しい文化を生む。その種の文化がひとたび形成されてしまうと、そう容易には後もどりなどできない。しかも、この半世紀、こうした新しい文化が堆積し積層を続けているわけで、この状況下で起こる事態である以上、それらは常に新しいといわねばならない。

人とメディアのかかわり・関係自体は大昔からあり、たしかに今のそれと昔のそれとよく似ているということもあるだろう。しかし、このふたつのそれがまったく相同・同質ということはまずありえない。インターネットと人との関係によく似たものがかつてあったかもしれない。けれど、あったとしてもまったくは等しくない。そして少なくともぼくらは、インターネットを決定的に新しいものとしてとらえておく必要がある、とぼくは考える。インターネット上のコミュニケーションも人間が古来やってきたコミュニケーションと変らないと強調することは、インターネットの枝葉末節をあげつらっているだけ、のみならず、インターネットのもつ「異文化性」とでもいべきものを消滅させてしまい、その結果そこから先のぼくらの思考は停止したままになる。それが、新しい感性や思考を生み、場合によって新しいタイプの人間を出現させるかもしれないというインターネットの衝撃性を否定することになり、そのメディアとしての特性や可能性がみえなくなってしまう。これは大変にソンのことではあるまいか、と思うわけだ。



コードが流動化し、不安定になってしまったコミュニケーション、コミュニケーションの原義と矛盾しかねないこのコミュニケーション、こうしたものが人の歴史とともに古く、かつ今日のニューメディア・マルチメディア状況に、電子メディア革命の時代に、新しい衣裳で登場し定着しようとしていること、そして再三いうように、コミュニケーションのタイプに優劣の差はつけられないこと、これらと同一主旨のことは、すでに60年代から多くの考えの中にあっただと思う。

「さまざまなものを対象としたコミュニケーションが存在する」「対人的コミュニケーションはあくまでもその一形態にすぎない」「これら対象たりうる『もの』をひとくくりにして『メディア』というパラダイムがある」「コードが流動している状態が人間的コミュニケーションにおいて常態であり、コードの一致や一致への圧力・強制は特定の状況の下でのみ許される、もしくはありうる」といった命題群、これら命題群を前提することによって、「コミュニケーション理論」を書き換えねばならない、前著の時を含め70年代以来考え続けていた。ここでとりあげているさまざまな問題は、書き換えに際しての重要関連事項ということになるだろう。

## 九 メディア人間再説—モダン／ポストモダン

「天が下に新しきことなし」ということばがある。あるいは「古へに学べ」とか「歴史に学べ」というものもある。人間の歴史は、繰り返すというか、よくいってスパラル状の循環構造をもっていて、なにやら新しいものが現われても、それと同種のを過去のどこかに見出すことができる、という観念的操作が可能で、人はまたこれを好む。「80年代は70年代に似ている」とか。だからなのだろうが、危機的状況なるものも似たものはさがし出せるから、危機の乗り切りには過去の事態やその時の歴史的経験というのが役に立つはずだとなる。まったくの嘘言ではないのだろうが。

「今時の若いもんは……」というものいいはすでにエジプト時代にあっただけで、この点では事情は数千年変っていないことになる。がしかし、この台詞には他方、「若い世代のこと、やること等は理解しにくい」という含意があるから、数千年前から、後続の世代は先行の世代に対して必ず「新しいこと・もの」をもっていたことになる。つまり「天が下には、必ず新しいものがある」ということを意味している。

な類縁性は存在しないからである。外側からそれ、をいくらみても、意味はとり出せない。無垢の眼には決して自然は美しくもないし怖ろしくもない。美しいとみるのは、「文化的に構成された眼」だけである。この「眼」とは、つまりはコードである。コミュニケーションには、常にコードが作用している。しかし、「もの」や「こと」が「対象の場合のコードは、ある文化圏でゆるやかに共有されていることが多い。というか、特定の自然・現象に対して必ずコードが指定されてはいるけれど、強制力があるわけではない。だから自然や現象の意味は多元的でありうる。メディアが対象の場合はどうだろう？ 次のような事実は存在する。70年代以降の価値の多様化・相対化の下で、対人的なコミュニケーションの状況においても、多様化・相対化、したがって意味の両義化・多義化、必然的にコードの流動化・自由化が認められるようになった。かくして、かつて対人的コミュニケーションでコミュニケーション成立の前提であった「コードの一致」は、優先的な価値をもたなくなった。「ディスコミ」とは本来なら一致すべきであるコードの「不一致」の現われであるとする、意味の相対化・多義化が常態のコミュニケーションでは、「ディスコミ」などもはやありえない。あるいは「コードの流動性」が当り前だとすると、この種のコミュニケーションは、常に「ディスコミ」の状態にあるともいえる。コミュニケーションと「ディスコミ」がほとんどアナーキーに交替・交錯する。なんとも魅力的なコミュニケーションではないか！ 本題からはちょっとはずれてしまったかな？ いずれにしろ、もう、眼の色を変えて「ディスコミ」を邪悪視する時代ではない……。

あるタイプの人間にとって、コードが不安定で意味が共有できず、伝えるべきことが正確に伝わらないコミュニケーションは居心地が悪く、気持も悪く、そして不安でもあるだろう。しかし別のタイプの人間にとって、コードが流動的であるが故の自由なコミュニケーションは、みずからの好悪・美意識に大きく依存しながら意味を読みとる、いや創造できるコミュニケーションは、まさに魅力的であろう。歴史をさかのぼれば、人が人工的に創造するメディア・「もの」は相対的に少なかつたはずであるから、この種のコミュニケーションの対象に自然の占める割合はより大きく、人はそこにおのがじし多量の意味を読み込んでいたにちがいない。途中をとばして近代後期ともなると、コミュニケーションの対象になりうるメディア・「もの」が急激に増加する。そして、多くの人々がそのコミュニケーションに、対面的コミュニケーションの息苦しさから解放された自由で気おけないコミュニケーションの世界を見出し、これを特に好むようになる。こう考えると、歴史的な文脈の上でこれを見るかぎりとりたてて異様な傾向ともいえないのではあるまいか。

ートしている。なにか特別のこととしてでなく、ごく自然な人間的行為としてメディアと対話している。それは決して、対人的コミュニケーションが下手だから、仕方なく代償行為としてメディアを相手にしている、というようなものではない。人間は、人を相手にしたりメディアを相手にコミュニケーションする。本来はメディアでないものを相手にしてコミュニケーションすることだってある（まあ、その瞬間、それはメディア化される、というのがこの稿での考え方であるが<sup>(7)</sup>）。仮に、人を相手のコミュニケーションと、メディア相手のそれと、非人格・非メディア相手のそれとにわけた場合、どれかが正常なコミュニケーションで、他のふたつは正常でないとか、あるいは正常から偏った、歪んだ、変形し変質してしまったコミュニケーションとはいえない。この三つのうちのいずれかにコミュニケーションとしてのプライオリティを与えるわけにもいかない。

コミュニケーションの相手を「メディア性」というカテゴリーでみなおしてみても結論であった。この文脈の上であらためて、近代後期に登場したニューメディア、マルチメディア、あるいは機能的にも構造的にもまったく新しいいくつかのメディア（例、携帯）の位置づけを、相当に多面的に試みたのが前著であった。もちろん「序説」という形で。しかし、その際たとえば右に書いたような、コミュニケーションの三タイプの間の等価性の問題、三者の間のプライオリティの問題、こうした問題の検討は、序説であろうがなからうが、本格的な議論が必要だ、と思うようになった。

少し前のところで「ディスコミ」のことを書いた。そこでも書いたように、これは、一面では、送り手のコードと受け手のコードの不一致である。理想的な形のコミュニケーションでは、ふたつのコードは一致していなければならない——ことになっている。対面的なコミュニケーションでは、コードの一致の確認をしながらのコミュニケーションが可能であって、だからこれが理想の形であることの根拠となる。ところで、メディアや非人格的・非メディア的「もの」とのコミュニケーションの場合、コードの働きはどうなるか。

しばしば指摘してきたようにメディアであれ「もの」であれ、人がコミュニケーションした時、そこに広義の意味が生まれている。これはいいなおせば人が「もの」に直面した時、広い意味の解読が必ず行われていることを意味している。人間は解読して意味を求める。その解読にコードは不可欠。なんとすれば、ごく少ない例外を除いて、メディアや「もの」の外部形態と意味の間には論理的・因果的

いか、など<sup>(5)</sup>。つまり、コミュニケーションの理想的スタイルは、自立した人格間の対面的コミュニケーションであり、他のスタイルはこれから派生したものであって、その形態が理想的スタイルから離れる度合に応じて、あるいは比例して機能障害が拡大し深刻化する<sup>(6)</sup>。したがっていかにしてその障害を最少するかが、コミュニケーション論の実践的課題である、といった議論への反撥といってもいい。こうした認識から、「メディアとの擬人化したコミュニケーション」とか、「送り手と受け手の間のコードの不一致」とか、「誤解を正常とみなすコミュニケーション」といったパラダイムを使ったことはあった。しかし、この段階では、いわゆる近代的思考の、いうならば欠陥を補うというほどの意図しかなかった。

ところが、あらためて人とメディアのかかわりを、それ自体として、あるいは既成の固定観念をはずして眺めてみると、対人コミュニケーションも本当は多様かつ多元的であり、そしておそらくは基本と派生などという優劣の差など本来ない各様のコミュニケーションの一形態にすぎない、というふうに見える。たとえば人間の知的生産物の多くが、たしかに対人的とその変形であるコミュニケーションの結果であることはたしかだ。しかし同時に、自然から人間精神の創造物まで、遊びにかかわるさまざまな仕組み・仕掛けから宗教的な構成物まで、必ずしも対人的コミュニケーションの成果とはいえない。もの・遊び・観念・宗教等々の完全には人格的ではない「もの」と人間のかかわりの結果という事実も否定できない。こうした「もの」と人間とのかかわりも、とにかく一方の主体が人間である以上、意味的關係であり、意味が介在している。だからこのかかわりもコミュニケーションである。対人的コミュニケーションではないが。このもうひとつのコミュニケーションの成果である知的創造物もまた、膨大である。芸術的作品のほとんどは、このもうひとつのほうのコミュニケーションの創造になるのではあるまいか。だから、対人的コミュニケーションと、人間と「もの」とのコミュニケーションと、どっちがより多くの知的生産を行ったか、を比較する議論が、有意義に成り立つはずだ。

右に書いた「もの」とは、文化の一端を構成していて、多くの考えからすれば、同時にメディアでもある。だからもう一度いいおすと、人はメディアと、かかわること、つまりはコミュニケーションすることで、巨大かつ膨大な知的創造をしてきた。そして、右のような多くの判断だと、メディアと人間のかかわりは芸術以外の領域を含めて対人的なコミュニケーションよりかずと知的でずっと多く創造物を残してきた。知的云々という文脈をはずしていても、たとえば現在、人は、人々よりもメディアとより多くコミュニケ

に馴れない、たとえば爬虫類が好まれる。ここで求められているコミュニケーションは、「人間味」とでもいうべきものがまったく欠落した相手とのコミュニケーション、極端に形式化し、意味のあるメッセージを含まないコミュニケーションである。無色透明で、無音で、無臭で、温度零のコミュニケーション。基底集団の崩壊の結果はそこまでゆくという考えに、ぼくは傾いていった。こういう状況の歴史性をカッコに入れば、人は基本的に対人コミュニケーションへの願望をもってはいるはず、というのがその昔のぼくの考え。もちろん、依然としてコミュニケーションについては「人間味」を重視する考えのほうが社会的には常識だろう。

「メディア人間」というパラダイムは、個人的には十年ほど前から、深刻かつ鮮明な問題意識もなしに、単純に便利ということで使用してきた。前著では、広義のメディアを真中にして、人間・文化・社会現象を再配置し、その上で現象の意味づけをあらためて試みた。だから「メディア人間」を単なる論理操作上のパラダイムとしてのみならず、現実の人間の思考と行動と対照させながら、現象の認識・分析・記述のための基本的なカテゴリーとして検討し、前著の理論展開の主要なパラダイムとして概念内容の整理もしている。「メディア人間」という視角から、あらためて人間そのものを、そしてその思考と行動を、みなおすという作業になった。ごく日常的な生活行動から、様式化された儀式的非日常行動まで、前近代的な社会・人間状況から脱近代のそれらまでを視野に入れて、人とメディアのかかわりのすべてを眺めなおそうとしている。その時頭の中にあつたすべてを、あるいは思考の過程にあつたすべてを前著に書いたわけではないが、人とメディアのかかわりの、いままでの社会科学的思想ではさして注目されなかった、いうならば端倪すべからざるを様相のいくつかを例示することになった。

人とメディアのかかわりが、社会科学的思想というか、あるいは近代性というか、そういう観念体系で捕捉される側面のほかに、「近代」というカテゴリーには十分に属しきれない側面のあることは、以前から気になってはいた。たとえば「ディスコミ」ということばがあつて、これを正常なコミュニケーションからの逸脱・乖離とみなし、いかに正常なコミュニケーションにもどすか、正常なコミュニケーションをどう回復するか——という議論に、ある種納得しきれないものを感じていた。あるいはまた、自立した主体間の民主的対話が、集団の正しい意思決定スタイルであり、この方法によってのみ正当な決定が得られるという「民主主義の方法」にも懐疑的で、この方法以外にも妥当な結論に到達する方法がありうる、「民主主義の方法」が不可侵の唯一正しい方法でないのではあるま

は、日々に新たに、という感じであるが、その革新の尖端部分とより多くより強く親和すれば、異様な世界像になっていっこうにおかしくない<sup>(4)</sup>。ともあれ、ベクトル成分を問わなければ、「メディア空間」は、ア・プリオリに、世界認識・世界像の形成の潜勢力をもっている。「メディア空間」はそっくり文化に属する以上、当然といえば当然なのだが。要するに、これは、文化の機能であり、メディアの機能なのである。

## 八 ディスココミュニケーションのメカニズム

再三指摘したように、広義のコミュニケーションの相手として、人そのものを好むムキと、どちらかというとなんか非人格的なメディアを好むムキとがある。どちらを好むかは、どうやら生まれながらの性格ではないか、と思うのだが本当はどうなんだろう？ まことにもって非科学的な物言いで慚愧にたえないわけだけれど、だけど科学的に装いを整えた命題が常に真とは限らない。コミュニケーションのスタイルの好みは多分に先天的に決定されている、というのは当てるのではあるまいか。雑談するときの態度・物腰、公共的な場でのコミュニケーション携帯ツールの扱い、私的な生活空間内のメディアの心理的・物理的位置づけ等々は、「必要にせまられて」という面がたしかにあるけれど、生来の好みが露呈しているといわざるをえないところがあるように思う。

が少し前までばくは、若干違った考えかたをしていた。人は程度の差はあるにしても、本質的に人を相手とするコミュニケーションに対する願望をもっている、あるいはかなり強い生理的欲求をもっている、これが適度に充足されないと心理的・精神的障害におちいる、と考えていた。だから、たとえば子どもが、親との対話から逃避して、マンガ・テレビ・ゲーム・パソコン、あるいは個室に逃げ込むのは、ある病的な行動である。ところが近代後期の段階に入った社会の場合、家族・地域社会・仕事の現場等の基底集団の溶解・解体・崩壊という現象が共通して起っている。対人的コミュニケーションの相手が扱えられなくなる、対人コミュニケーションに不器用になる、その習慣が乏しくなる、対人コミュニケーションを嫌悪・忌避するようになる、対人コミュニケーションを拒絶する、そして非人格的存在(メディアからペット、趣味まで多様)をコミュニケーションの相手として選ぶようになる。のみならずペットにしても、鳴き声、臭気、行動においてある種人間に対する親和性を示す動物よりも、生物であるという実感がごく希薄な、要するに人

さらには「食う」ことにまつわる習慣やマナーやタブーやその他その他も含まれる。<sup>(2)</sup>つまり、食べものの好悪も意味の結果なのだ。そして一事が万事である。生活の全局面を対象にそれぞれに形成される像は、いずれもこうした意味の結果であって、ほとんどはごく自然に（つまり意識せずに）形成される。あえていえば、人は「メディア空間」に生み落され、そこで育つことによって、ほぼ必然的に世界像をもつようになる。もちろん、人がなんらかの理由があって、それまでの「メディア空間」と相当に異質な「メディア空間」へ、意識的に移動することがある。たとえば、特定の宗教集団にみずからの意志で参加するとか。こうした場合、当然のことながら、彼の世界像は大きく変換する。しかし、相対的には、多くの人々が成育の過程で徐々に形成された、世界像を持続させている。<sup>(3)</sup>

多くの人々にとっての世界像が、このように少しずつ着実に、あまり意識せず自然に形成されることが重要である。今日ではほとんどの人が、いわゆるマスメディアに四六時中さらされている。つまり、現代人はそういう「メディア空間」の中にいる。そこに提示される実にさまざまな情報とメディア、これらが直接・間接に世界像の形成に寄与している。一昔前、かの有名な「支配的な思想とは、支配階級の思想である」という命題がまだ信じられていた頃、メディアが人々の意識や思考を支配する危険性がしばしば指摘された。いや今でも、マスメディアの支配力について幻想を抱いているムキもある。しかし、客観的に眺めてみて、今日のマスメディアのさまざまな情報がそれぞれにもっている意味もしくは価値的ベクトルは、それこそさまざまであって、全体としてみるとさまざまなベクトル成分が相殺しあっていて、「メディア空間」全体は価値的にはニュートラルな無重力空間になっている。だからさまざまな志向をもった世界像が多数存在している。実際、価値の多様化は事実である。マスメディアの特定世界像をつくる支配力は大変低下している。もう零とっていいかもしれない。

いうまでもなく、「メディア空間」の現在は、世界像を形成する「力」をもたない、ということではない。実際この「メディア空間」の中で、実に多様な世界像がつけられている。ある特定の世界像を多くの人々に押し付ける「力」や能力や権威をもつものなどもうないだけである。'60年代と比べてみればわかるように、今のこの時代、いかに多様かつ多元的な世界認識が成立していることか。しかも多様になっただけではない。'60年代にはとても考えられなかった世界像の持主がいる。特に若い世代のそれは、民族と宗教と文化的伝統を異にした異文化圏に属しているようにすらみえる。世界像はそういう意味では、変質した。「メディア空間」のイノベーション

る、あることからの倫理的な性格が変わって一般の認める（認めない）ところとなる、ある特殊だった考えかたが支配的になる等々、こうした現象は、当該のことがある種の「力」をもったことを意味している。ではどうやって「力」を獲得したか。現代では、それらことからの社会的「メディア空間」における露出量・露出頻度・流通量・密度が「力」を与えているとみていいと思う。そして今や、「力」をもっているとされている特定の機関とか、権威という名の「力」をもっている人物の意思や評価とか、「メディア空間」の磁場の意図的な操作とか、こういうものの「力」が弱くなりほとんど作用力・影響力をもたなくなっている。頻度や密度は、メディア相互間の市場的競争という道徳的にはニュートラルな働きによって、結果として決定される。つまり、社会体制や政治にかかわることがらから、小さなことばの流行りすたりに至るまで、「独裁的な力」の意図的な操作など意味をもたなくなってしまう。70年以降、政治における支配的な傾向がどのように推移してきたか、巨大な社会現象がどういう仕組みで消長したか、さまざまな流行はそれぞれどんな内的メカニズムをもっていたか、をいくらか立ち入って考察してみれば、ことはさらに明らかになるはずである。こうしたことは、現在の「メディア空間」がどういう構造をもっているか、どんなふうに作用しているか、どんな特性をもっているか、をも意味している。

人は意識すると否とにかかわらず、たとえばみずからが属している家族を体験しながら、あるべき家族を夢みる。その結果、彼（彼女）固有の「家族像<sup>イメージ</sup>」をもつようになる。同様に、周囲や環境、地域社会や社会、国家や政治や外国との関係、さらには自然や地球や宇宙等々についても、なんらかの像<sup>イメージ</sup>をもっている。これまた彼（彼女）なりの、である。これら像を統合したものを世界認識もしくは世界像と呼ぶことにしよう。意識／無意識、明確／漠然、整合／不整合といった違いはさまざまあるにしても、誰しもが世界像をもっている。人が、ことにのぞんでなんらか評価したり判断したり意思決定したり決心したりする時、直接・間接にこの世界像が基底にあって、もしくは基準になって、判断・決定に作用し影響を与える。

この世界像は、成長の過程で、磁界をもった「メディア空間」に在ること、自然に形成される。食べ物に対する好悪感も世界像の一端を構成しているが、これなども彼の育った生活空間のもっていた個別的食文化の結果である。いうまでもなく、その食文化とは、決して「もの」としての食べものだけのつくる体系ではなく、象徴化し記号化しメディア化したレシピのつくる意味の体系であり、



社会的自我・社会的人格とは、自己に内面化された「社会」である。その中身をごく単純化していうと、内面化された「社会」とは、論理的・美的判断の基準、行為・行動のベクトルもしくはベクトルを決める基準、自己と周辺にあるものを意味づける根拠にはかならない。こうした基準や方向性や根拠の人格内部への定着は、幼児期から無数に繰り返される周囲との広義のコミュニケーションの結果である。幼児にとってこのコミュニケーションの相手は、親であり、兄弟であり、近親者であり、そして彼らとみずからを含めて成立している生活という場、状況・空間である。そしてこの他者もしくは場の属性が、基準・方向のありようを教える。属性とは、いわば伝えられる意味なのだ。いうまでもないのだが、このコミュニケーションが行われているのは、明らかにメディア空間であり、他者という人格や場や状況はメディアとして機能している。幼児が置かれているこの「コミュニケーションの世界」の中で、おそらくメディアのほうは、幼児に対して教育を課すなどと直接意識しているわけではない。ほとんど習慣化した日常の営みがあり、その営みにコミュニケーションが含まれていて、主体的意思などのまったく意識していない、自覚もしていない結果が「社会」の内面化であり、社会的自我の形成なのである。この習慣的行為の成立している場が「メディア空間」であること、これが重要である。

社会の内面化・社会的自我の形成とは、もう一回換言すると、広義の社会的規範の内面化ということである。右に、この過程が習慣的で、ほとんど目的意識なしに、と書いた。要するに結果として内在化があるわけだけれど、その定着量、定着の度合、定着したものの強度・作用力は、メディア空間もしくは文化のもっている磁場の強さと比例関係になっている。倫理性の強い社会では、周囲の人たちの行動・行為の倫理性が高く、その行動を模倣する子どもたちの行動様式も強く倫理性を帯びる。大人たちによる期待にそった場合の社会的報酬の高さ、そむいた場合の社会的制裁の厳しさがあるからだ。幼児をとりまいている「メディア空間」が、どういう意味・価値のベクトルをもっているか、ベクトルの分布はどうなっているか、その強度はどの程度か、そして期待と制裁は？——これらが、内在化とその定着度を決定している。内在化と定着は、どうやら社会が顕在的に保持している教育理念や教育意思、そのための明確に特定できる法的・制度的な教育システム等々とは、直接に関係がないようなのだ。むしろ文化という場としての「メディア空間」が、自然現象のごとく保持している磁場の強さに依存しているらしい。

あることばが流行語になる、ある歌が流行歌になる、規範外だったあることばの用法が規範的になる、ある行動様式が一般性を帯び

そも思考としては不毛である。

この地上にある文化・言語は、文字通り、多種多様であり、個々の文化・言語は決して特異でない（特に他よりすぐれているわけではない）が、相互に異質であるという意味ではすべて特別である。たとえば言語形成の系譜や、言語間の類縁性の議論は現実にはなんの意味もない。英国の英語と米国の英語とそれ以外の国々で常用されている英語とを対比してみれば一目瞭然である。それぞれが特別といわざるをえない。たとえばそれぞれの英語に堪能な英国人と米国人とその他との間に、完璧なコミュニケーションが成立するとは、ぼくにはとうてい思えない。つまりは、その程度にそれぞれが特別なのだ。

人間は、その特別なところに生み落とされる。他の特別を選ぶ自由などない。社会的自我というか、社会的人格というか、そういう点ではまったく無色透明・白紙の状態から出発して、ほかでもないその特別の中で人格を形成する。特別な色付けを一方的に受ける、ということである。その色付けこそ、社会的自我・社会的人格の形成、つまりは人となり・持味・性格の形成にほかならない。人間という種の面白さなのだが、まったくの無色から出発して、しかも同一の文化的・言語的風土で色付けされても、性格や個性の違いが出現する。と同時に、まったく異なった文化の下で育ったにもかかわらず、異文化間の人間的コミュニケーションが一応は成立可能である。おそらく文化とは、つまるところ、人間的自然が、異なる気候や地勢や歴史を背景に作るものであり、その中に異質な「もの」への興味・関心、そしてそれとの交流の願望が含まれているからであろう<sup>(1)</sup>。

さて、本論にもどろう。「文化」と「言語」とをあげて議論してきた。前稿でも再三にわたって指摘したように、文化とメディア、記号・言語（ことば）とメディアの境界線は大変に曖昧である。ことばはそれ自体メディアでもあるし、文化とは人間の営む社会的空間のもつ潜在的・顕在的屬性、あるいは空間という「場」が帯びている磁界のようなもので、しかも「もの」に意味を与える仕組みだとすると、「文化はメディアを含む」「文化はメディア性を帯びている」「一般に文化の項目とされているものは、他面ではメディアである」という命題は直ちに成立する。文化と言語が、この程度にメディアと概念的に重なっているとすれば、人はメディアによって色付けされ、人格を与えられ、性格・持味を形成する、ということになる。つまり、社会的自我・社会的人格を形成するのはメディア、少なくともメディアのつくる世界の中で人は自我と人格をつくってゆく。

## 七 メディアの規範性

人間の心や精神（の働き）を一番制約し拘束し、時には強制を課しかねないもの、それは文化であり、もっと限定して言えば言語である。文化にしろ言語にしろ、これらが人間的な自然（「生まれながらのヒト」という意味）に対立する所以は、とりあえずふたつある。第一に、地球上には多種多様な文化・言語があるけれど、生まれた時人間は、文化も言語も選べない。生まれ落ちたそこにある文化・言語を受け容れざるをえない。この時人間はまったく自由でない。第二に、文化には、客観世界にある諸々を性格づける機能があり、言語はもの・ことに名称を与えさらに制限的に定義づけをする。性格づけ・定義づけをすること、もしくはもの・ことにある種の性格的限定を与えること、これなしに人間はもの・ことを認識しえないからであるのだが、ひとたび限定を加えてしまえば、それにかかわる人間の心の働きは制約される。人間は外部環境を認識せざるをえないのだが（生きるためだ）、その認識の代償として、心と精神の働きの一定の制約が課せられる。つまりは一定量の自由を放棄せざるをえない。もちろん、人間が心と精神の働きの自由などということを想念しうるのも、文化と言語の中で育ったからでもある。が、この文化・言語の宿命性、あるいは逆説性がまた、「言語批判論」の契機にもなるのだ。

思うに、人間の精神の働きの自由（ぼくはあると思う）を可能にしてくれたのは、言語である。この場合の言語とは、「観念と思考の実質としての言語」という意味である。しかし、ひとたびその言語によって心と精神が働きますと直ちに、言語＝ことばの限定性（ことばとは本質的にそういうもの）が、その働きを制約する。それが逆説性の中身である。人間存在の逆説性といっているくらいだ。この逆説を寓話的に、コミカルに、あるいは客観的・諷刺的に、そして見事に文学化したのが、芥川の『河童』だと思うのだが。『河童』はおそらくほとんど読まれていないし、話題にもならない。思うに、60年代以降の対抗思想の中で「言語批判論」が相当に注目されるという状況では、『河童』に内在する「思想」は許されないのである。しかし、人間と言語の逆説的關係に少しでも思いをいたしたら、「言語批判」などと暢気なことはいってられないと思うけれど。早い話が「言語批判」を言語・ことばを使ってやっているという根本的な自己矛盾について「言語批判」を口にする人々はどう思っているだろうか？ 代替案のない批判は、自己満足で終りだし、そも

# ザ・ミーディアム

——メディア論の試み——(III)

## 第二章 人間——メディア生態描写(2)

本稿は、前稿の続きである。生態の描写が続く。が、生態描写はとりあえずここで一段落である。しかし、その生態のすべてを、細部にまでわたって、書ききったという自信は、当然のことながら、ない。書き加えるべきことが現われたら、書き加えねばならない。したがって、正確には「未完」である。活字になった後、前稿・本稿のリライトは避けがたいだろう、と思っている。

前稿では明確には書かなかったと思うが、なぜ生態描写をするかといえば、ある公理的命題もしくはパラダイムにたどりつきたいからである。つまり、描写を続けながら、ぼくの頭にあるのは、その命題・パラダイムである。前々稿、前稿で書いたように、ぼくが頭の中でこの命題・パラダイムにたどりついたのは、前著を書いている時だった。その命題・パラダイムを論理的に、そしてわかりやすく説明するためには、前々稿、前稿、本稿が必要だった。実際、書いていて「命題」の説明には長すぎるとは思った。しかし、ぼくの主観の中では、長すぎるかもしれない描写もすべて、その命題と結びついているし、描写はまた現在の社会・文化的メディア状況の理論的かつ批判的な説明にもなっていると確信している。

中野 収